

# R7(2025)年 共通テスト本試

ありあけ わかれ

## 【文章I】『在明の別』現代語訳

おおいぎみ

【文章I】右大臣の娘である大君は夫である左大臣の子を妊娠している。一方、右大臣の妹である女君は、かつて契りを交わした左大臣との関係が途絶え、苦悩を深めていた。そのころ、大君が病になり命が危うくなったため、僧が呼ばれて祈禱きとうをすることになった。

ざす

山の座主、慌て参りたまへり。御枕上に呼び入れ

比叡山曆寺の座主(II最高位にある僧)が慌てて参上なされた。(座主を大君の)枕元に招き入れ

おとど

きこえて、右の大臣、御手をすりて、仏にもの申す  
申し上げて、  
右大臣は  
両手を擦り合わせ、  
(まるで)仏に物申す

やうに、「ただ、いまひとたび、目を見合はせたまへ。  
ように、  
」どうか、  
もう一度、  
(この娘と)目を合わせ(られるように生き返らせて)下さい。

あまたはべる中に、何の契りにか、アいけなくより  
たくさんおります(私の子供の)中でも、どのような前世からの因縁があったのか、幼いころから

たぐひなく思ひそめはべりにし闇を、さらに晴るけ  
比類なく  
愛しく思っていました、  
子を思うあまりに分別を失う親心の心の闇が、全く

はべらぬ」と、泣きまどひたまふに、いと静かに数珠  
取り除かれませんか」と、  
ひどく涙を流しなされると、  
(座主は)とても静かに数珠を

押し揉みたまひて、「令百由旬内、無諸衰患」と  
も  
りやうひやくゆじゆんない むしよすいぐゑん  
「令百由旬内、無諸衰患(周囲から衰え患いをなくす)」と(『法華経』  
押しもみなさって、

読み。たまへる御声、はるかに澄みのぼる心地する  
の(一節を)読みなされる御声は、  
遠くまで昇って澄み渡る感じがする

に、変はりゆく御けしき、いささか直りて、目を  
なか、(死にそうに)変わっていく(大君の)顔の様子が、少し回復して、  
目を

わづかに見開けたまへり。あるかぎり、イなかなか  
少し  
開けなされた。  
(周りの者は)全員、  
かえって

手まどひをして、「誦経よ、何よ」とまどひたまふ  
ずきやう  
慌てふためく様子で、  
「誦経をせよ、何々をせよ」と  
うるたえなざる

に、なほ心ある人とも見えぬ、御かたちも変はり  
けれども、やはり(大君は)意識がある人のようにも見えず、  
容貌も  
変わり

たるやうにて、その人とも見えたまはず。  
果ててしまったよう、  
本来の大君のようにも見えなさらぬ。

いとにほひやかにけ近きものから、妬げなるまみの  
ねた  
とても 艶があつて華やかな感じがする  
けれども、  
激しい嫉妬でつらそうな目もとの

けしき、左の大臣はさやうにも分きたまはず、父殿  
わ  
様子に、  
左大臣は  
そのように(大君が憑依しているの)も分かつていらつしやらず、(父である)

ぞ、いとあやしう、「思ひかけぬ人にも似たまへる  
右大臣が、とても不思議に(感じて)  
「意外な人」「自分の妹、大君」にも  
似ていらつしやる

かな」と心得ず思さるるに、うちみじろきて、  
おぼ  
なあ」と  
理解しがたくお思ひになっていると、  
(大君が)少し身動きをして

さまざまに朝夕こがす胸のうちを  
さまざまに  
明け暮れ胸を痛める嫉妬の恨みを、

いづれのかたにしばし晴るけむ  
どの姫君に(ぶつけて)  
少しの間、晴らした(らよい)ものだろうか

とのたまふけはひ、いささかその人にもあらず、  
たが  
と仰る様子は、  
少しもその大君の様子ではなく、  
(妹である女君の様子と)

違ふべくもあらぬを、父大臣のみぞ、かへすがへす  
間違はずもないのを、  
右大臣だけが、  
繰り返し

「あやし」と傾かれたまふ。  
かたふ  
「不思議だ」と  
首を傾げなざる。

さて、わが御心おはせねば、また消え入りつつ、  
また  
また  
亡くなりそうになりながら、

さらにとまるべくもおはせぬを、「今は  
全く(この世に)留まりそうでもないらしいやらないのに、  
(座主が)「今は(大君の体調は)

けしう。おはせじ」とおし静めつつ、いたく噎れたる  
そんなにお悪くはないだろう」と(周りの者を)静かに落ち着けながら、  
とても かれた

御声やめて、薬師の呪をかへすがへす読みたまふに、  
声(での読経)はやめて、  
薬師如来の力によって病気を治す呪文を繰り返して読みなされると、  
やくし ず

御もののけ現れ出でて、小さき童に駆り移されぬ。  
ものけは(大君から離されて)現れて、  
小さな童に  
乗ら移らせられた。  
わらは

ウ 呼ばひののしる声に、今ぞ御心出で来るにや、  
(童が)大声を出して叫び続ける声に、  
(大君は)やっと正氣に戻ったのだろうか、

人々のまもり。きこゆるを、「はしたなし」と思して  
(周りの)人々が見守り  
申し上げるのを  
「気恥ずかしい」と  
お思いになって、

御衣を引きふたぎたまふ。  
御衣を  
かぶって顔を隠しなされる。